

本年は日中平和友好条約締結 40 周年を迎える。日本と中国は古くから「一衣帯水」の深い結び目につながり、日本は数多くの中国文化を吸収してきたことは誰しもが認めるところであろう。その 1 つに医療がある。中国に発芽した伝統医療文化は日本国民の健康に大きく貢献した。さらにそれらは、日本国民の体質に応じた医療として、日本の医術者らの手によって「日本の中医学」として開花した。

中国の伝統医学は、中国古代の諸子百家という哲学・思想集団に端を発し、とりわけ道家（哲学）思想は古代中国人の固有の文化として発展を遂げ、医学にも影響を与えた。日本においても、中国の儒家・道家思想は学問の一端として取り入れられ、日本人の道徳観を深め、日本の精神文化に繁栄をもたらした。その後、西洋文化の進出により、日本は東洋と西洋の狭間で、異なった東西文化が入り交じるなかで日本独自の文化を形成した。また、中国伝統医学を吸収した日本では、異論を唱える医家らの存在がありながらも、実践現場に携わる数多くの医術者によって、医療技術の吸収と共存を繰り返し、現在の東洋医学の礎を構築した。経験則にもとづいた医療は、さらに理論化され、誰にでも習熟可能な医療として実用化されるに及び、現代医学では困難とされる難病への取り組みを歩み始めている。

昨年の 12 月 9 日、東京大学において新出土医学簡講演会が開かれた。そこでは中国成都市、天回鎮老官山漢墓 3 号墓から出土した 951 枚の医書竹簡および漆経脈人形の最新情報が報告された。これらの資料は中国考古医学の定説を覆す重要な発見であり、中国伝統医学に携わる教育者にとっては注目すべき内容であった。当日は中国成都天回鎮漢墓研究部責任者であり、中国中医科学院の柳長華教授のほか、研究現場で直接出土資料にかかわった数多くの研究者らによる現状報告があった。5 年以内に正式な著作物として発表されるとのことである。これらの資料は、医学・人文・自然科学などの複数の学問から、伝統医学のさらなる発展を導き出すための良いきっかけを作っているように思われる。今後、各国の医学界で研究討論を積み重ねていく必要が生まれるであろう。

天回鎮老官山から出土した医簡や経絡人形などの資料をみると、当時の医家らが疾病に取り組む姿勢がみえてくる。その後成立した『黄帝内経』等には、そのパーツとなる医学資料が、数多、存在しており、『漢書』芸文志にもこのことの一部が記されている。

日本中医学会の歩むべき方向が、東洋哲学を軸足とする医療であるならば、国や地域、民族によって分類や区別することなく、地球民族といった壮大な規模で専門家間の交流を進めなくてはならない。国民の健康を守るのは人材の育成と複

数の専門領域からの研究検証である。いま、これらをより深く進めなくてはならない分岐点にさしかかっている。そのための牽引役の一つとして日本中医学会には期待がかかっているように思われる。

関西医療大学 大学院 保健医療学部  
王 財源